第2回　天橋立周辺景観まちづくり・学習会　議事要旨

日時：平成19年2月16日（金）14:00～16:30
場所：宮津市保健センター大会議室

１．開会

２．基調講演

基調講演　「住民主体のまちなみ保存運動? 出石の観光振興と景観づくりに学ぶ? 」
講師　株式会社出石まちづくり公社取締役　上坂卓雄氏

・宮津の印象

宮津、天橋立へは若い頃からよく来ていたが、とくに子どもが小さい頃は毎年夏に泳ぎにきた。10年ほど来ない間に、野田川バイパスができて大型商業施設が出店しているのに驚いた。国土交通省の「観光カリスマ百選」に選定され、各地で観光やまちづくりについて要請があれば出石の事例を紹介している。つい脱線して時間内に思ったことが話せなくて反省している。今日もわかりにくい話になるかと思うが、よろしくお願いしたい。

出石に比べて宮津は観光も歴史的なものもはるかに立派で、私たちがまちづくりに一生懸命になったのも、こちらに刺激されたからである。宮津には宝物がいっぱいある。旧三上家住宅は、もともと三上家は出石城主山名宗全の家老で、豊臣秀吉に滅ぼされて家臣がばらばらになったときに宮津に移ったという出石との因縁を教えてもらった。カトリック宮津教会をはじめ、明治時代に土地の材料を使って建てられた素晴しい建造物が多く、今度は仲間を連れて見学に来たい。「宮津のお地蔵さまめぐりあいマップ」を見て、これだけたくさんのお地蔵さまがあるのは全国一だと思った。こんなに素晴しいものがあるのを宮津のまちの人たちは知らないのではないか。昔から伝えられてきた文化や生活が土台になっているのが、観光であり、まちづくりだと思う。

・出石の概要

出石のシンボル辰鼓楼とそば屋

出石町は、平成17年4月に合併して豊岡市となり、人口9万人の大きなまちとなった。それ以前は1万1,000人ほどの小さなまちであったが、歴史が古く、町民は自信と誇りをもっている。「古事記」や「日本書紀」にも出石の名前が出てくる。新羅から渡ってきた天日槍が開いたといわれる。室町時代には山名宗全の本拠地であった。まちづくりは、自分のまちに誇りをもつということがいちばん大事だと思う。

・出石のまちづくりの経過

出石のまちづくりには観光から関わった。30代の頃に先輩たちから、鉄道が出石を通らなかったため、但馬の中心だった出石がさびれた。このままではいけない。城崎温泉から天橋立に観光バスがたくさん走っている。出石にも立ち寄ってくれないか。そんな思いを聞かされた。

まず手始めにシンボル的なものとして出石城の復元を計画した。昭和43年10月に2,300万円の町民の寄付によって隅櫓が完成した。当時は各地で城の復元が盛んだったが、ほとんどがコンクリート造であった。出石城は本物をつくろうと、姫路城の昭和の大修理を担当した専門家、大工に相談し、小さな隅櫓二つを木造と漆喰でつくった。町民の力を借りてシンボルとなる隅櫓をつくったが、当時はまちづくりや町並み保存というところまではつながっていなかった。

出石のそばは今でこそ有名だが、当時はわずか3軒が冬だけ営業していた。その1軒が仲間に入り、出石の皿そばを全国的に宣伝しようといろいろ取り組んだ。観光客に一人でも多く来てほしいという思いから、観光協会の組織拡大に向け、住民一般に呼びかけたところ、商店の人たち、医者、サラリーマンなど400人ほどが集まった。これで町を挙げての観光がスタートした。観光協会と行政と業者とで全国的にそばの宣伝をした。それが大成功して多くの人に来ていただいた。52年に観光案内所をオープンした。そば屋も土産物屋も少なかったので、役場の自転車小屋を改造して、観光協会直営店をつくった。

出石のまちなみ

保存・活用を検討されている酒蔵

出石には鉄道が通っていないが、全丹バスと提携して豊岡からバスで来てもらうことで、昭和52年に国鉄の周遊指定地となった。これにより国鉄が全国的に出石を宣伝してくれ、マスコミも乗ってくれて、大きな効果があった。

そば屋が増えると共に観光客入込み数も増加した。入込み客の数え方は、駐車場を基本に、観光バスは1台当たり25? 30人、マイカーは乗員数を計算した。平成7年に1000万人を超したが、いろいろな条件から落ちて、今は800万人台になっている。

昭和58年に静思堂完成、静思塾開校、塾長には草柳大蔵が就任した。出石から素晴しい人物が大勢出ている。沢庵和尚、初代東大総長の加藤弘之、そして斎藤隆夫は戦前に軍部が力をもって政治にまで口を出してきたときに国会で粛軍演説をしたことで有名である。草柳大蔵氏とはPTA連合会の講演に来てくれたのが縁で、斎藤隆夫のことを草柳大蔵氏が執筆するにあたり私たちも取材に協力した。斎藤隆夫記念館を静思堂と名づけ、静思塾という勉強会には年会費1万円で130? 150人が参加した。その勉強会で、出石はこのままではだめなまちになってしまうといろいろな人からいわれた。観光だけではなく、出石がもっている魅力に目を向けろと教わった。

静思堂

そこで出石の町並みのよさを教えてくれたのが東京の建築家・宮脇檀である。彼は静思堂、伊藤清永美術館、町役場、出石中学校など出石の公共施設を多く手掛けた。われわれも住民も観光客は何を目当てに出石に来てい

るのか知らなかった。そばもうまいけれど、出石の城下町の雰囲気を残した町並みを大事にしないと、変なまちになってしまうということを教えてくれた。これがまちづくりの第一歩であった。宮脇檀氏の友人の水谷頴介氏や、水谷氏のお弟子さんで神戸のまちづくり会社コー・プランの人たち、京都府立大の大場修氏、立命大の高田昇氏、彼らが出石のことを一生懸命にわれわれに教えてくれた。

昭和61年に出石まちづくり内町都市核形成計画を策定し、宮脇檀氏を中心に、内町、お城の内側を整備した。出石城の下にある駐車場と役場は幼稚園と小学校を移転してつくった。そのときに兵庫県から都市景観形成地区の指定を受け、この補助により出石のまちづくりは進展した。

昭和62年の旧城下町再生計画策定から基本的なまちづくりの計画が生まれてきた。ちょうど町並み保存を推進しようという全国的な運動が各地でおこり、兵庫・町並みゼミの第1回を出石で開催した。全国から集まった専門家から出石はこうするべきということを教えてもらった。

景観という、外から見えるものはみんなの財産である、これを大事にしようという基本的なことから、出石は城下町の雰囲気を残した町並みを大事にして立派なものに育てていこうと、住民だけのまちづくりの団体を結成した。これが昭和63年10月に発足した「出石城下町を活かす会」である。兵庫・町並みゼミで中心になった30人ほどでスタートし、大工、屋根屋、左官屋などの建築関係に呼びかけて198人集まった。行政から補助金をもらわずに自分たちの会費で運営して、何かをやろうとするときには行政なりいろいろな人たちの力を借りる。これが行政と専門家と住民と三者一体となったまちづくりである。町並みゼミは保存中心であるが、「出石城下町を活かす会」が目指すまちづくりは住民が生活するまちである。「活かせ町並み、創ろう景観」を合い言葉に活動している。美しい自然と歴史遺産に恵まれた出石町の明日へのまちづくりについて考え、提言し、行動するまちづくり団体である。

景観形成地区に指定された出石の歴史的な町並み景観をいかに次の世代に引き継ぐかを基本とし、自然に対してもアタックをした。当時は災害の防止が第一で、景観とか人にやさしい川づくりには国土交通省も県の土木も積極的ではなかった。15年ぐらい前から流れが変わって、谷山川の景観を守って、子どもたちが遊べるような川にしたいという念願がかなって、兵庫県が試験的に整備してくれた。

全国に江戸時代の様式を残したまちの芝居小屋が十数箇所あるが、近畿ではただ一つ出石に「永楽館」が残っていた。ところがこれは個人所有であり、修復するにもかなりの費用がかかるなど難しい問題があった。私たちが20年頑張った結果、建物を町に寄付し、土地を買い上げてもらうことで、やっと去年から工事にかかり、来年の秋にこけら落としができる予定である。

出石酒蔵が観光客に人気がある。昔は各地に地酒があったが、今は経営が苦しくなって減っている。酒蔵の修理を個人が負担するのは難しい。そこで、酒蔵の2階でコンサートを開催して、素晴しい建物があることをまず知ってもらおうと考えた。同時に、地酒を飲む運動にも取り組んだ。これに対して会員から、なぜ個人の商売の応援をするのかという批判もあったが、個人所有の建物を守っていこうとすると、県の景観条例ではだめだが国の伝統建造物群指定を受けると相当な補助金が出るので、それを目標に10年ほど前から頑張ってきたら、これも大きな商売になった。

出石にも古い城下町の道路を1.5倍から2倍に広げる都市計画道路の計画があったが、出石は整備が遅れていたおかげで狭い道路のままで城下町の雰囲気があった。それを残そうとすると都市計画と矛盾するので、道路計画を取り下げる手続きに取りかかり、3年ほど前に手続きが完了して、去年12月に市条例ができ、伝建地区指定に向

けて文化庁に今年中に申請する。認可されると酒蔵の修理にも相当な補助金が出る。

私たちが町並み運動をやっていた頃は伝建地区指定に住んでいる方は大変だったが、国の方針がゆるやかになって今では何でもできるようになって生活に支障がなくなった。伝建地区に指定してほしいのは商店街。後継者がいなかったり、高齢で商売ができなくなると家を壊して駐車場になる場合が多々ある。伝建地区になると壊す場合も届けが必要になり、その家を活かす方法について話し合いができる。

平成元年に出石町HOPE計画を策定し、出石らしい住宅について建設省と一緒に考えた。まちづくりを住民と行政が手を取り合ってやる、住民が積極的に参加していくということから、HOPE計画に対してもいろいろ便宜を図っていただいた。平成3年に、出石の町並みを守るために「まちやデザインマニュアル」をつくった。「出石景観賞」を設けて、新築や改築時に出石らしい素晴しい建物を表彰している。平成4年には出石城に登城橋と登城門を、町民の寄付金5,000万と残り5,000万を行政が出してつくった。

修景事例（郵便局）

・観光協会のあり方

観光協会は観光客を迎えるためにそば屋、土産物屋などいろいろなことを手掛け、毎年数千万の利益があがるようになったため、税務上の問題から、観光振興基金に積み立てて、これを運用してまちづくりに充てた。観光協会は民間主体の大きな組織であったが、何とか法人化できないか四苦八苦した結果、第三セクター方式の株式会社となった。これが出石まちづくり公社の基盤となった。

・出石まちづくり公社の設立

まちづくり公社は、資本金9,800万円、1株5万円で1,960株、株主総数330名であるが、当初は5,000万円でスタートした。当時、観光協会は行政の建物なり土地を借りていろいろな事業をやっていたことから、行政と民間が2,500万円ずつ分担することになった。観光協会は任意団体にすぎないので商工会を中心にしようと商工会の改革から始め、2年以上かけて積み立てて資本金をつくった。当初、出資者が集まるか心配したが、1人1株に制限するほど多くの応募があった。1年目、2年目は配当金0だったが、3年目から2%、現在は3%配当している。今までは行政の土地や建物を無償で借りて、その代わり観光振興基金として利益を全部もっていったが、使用料を払うようになった。

出石まちづくり公社

平成17年4月1日から豊岡市を中心に1市5町が一つのまちになった。出石は自分たちの力でまちづくりを考えていかないと先々難しくなる。そこで、まちづくり公社を中心にやっていくべく増資を考えた。9,800万円の増資をして、行政の持ち分が多すぎると動きにくいので20.41%の400株にした。出石観光協会をNPO団体に登録し、行政の持ち分100株を取得した。

増資分と借入金1億2,000万円で、まちづくり公社の前の駐車場を買い取り、その駐車場収入が公社の大きな収入源となった。まちづくり公社は観光協会からの流れで物販販売やそば屋が主な収入源だったが、それらを独占的にやるのは不都合なので将来的には民間に譲って、公社は民間のできないことをやっていくことにして、そば

屋は去年で撤退した。中心市街地活性化事業の補助金で登城門の前に集合貸店舗7店舗をつくり、その家賃収入も大きな柱となっている。

これまでは行政が出石の観光、町並み整備に力を入れてくれたが、合併後は出石だけというわけにはいかない。さらに補助金がカットされ、まず行政はあてにできない。商工会も数年のうちに合併しなければならない。出石のまちづくりはまちづくり公社が中心になる。自分たちで儲けて資金をつくって、1,000万円用意できたら県や国にあと1,000万円出してもらって2,000万の事業ができる。

去年、「いずし未来委員会」を立ち上げた。まちづくり公社を中心に、商工会、観光協会、農業団体、婦人団体、いろいろなところに呼びかけて40人の委員で、そばだけでよいのか、もっと頑張ってやらないといけないことがあるのではないか、模索している。

各地で話をするなかで、後継者はどうするのかと盛んにいわれるが、私がまちづくりや観光振興に取り組んだのは商工会青年部のときだったと若い人たちに発破をかけ、2、3年前から若い人たちが頑張っている。3年前の出石築城400年祭のときは天守閣を1年がかりでつくり、夏休みに子どもたちが色を塗る様子をテレビで取り上げられた。去年の出石そば伝来300年祭には、仙石氏が城替えで信州上田からそば業者を連れてきたことにちなみ、信州上田から出石まで昔の服装で1カ月かけて各地で交流をしながら歩いた。これもテレビや新聞に取り上げられた。今年は2月17日に京都駅ビル大階段駆け上がり大会に、小京都の関係から出石も出場する。

出石のそばを地域ブランドに認めてほしいと、まちを挙げて運動をしている。変なそばを出さないようにしていきたい。出石はこれまで順調にきたが、いろいろな面で問題を抱えている。これからどうすればいいか一生懸命に頑張っている。

宮津では昔の花街の雰囲気を残していこうという計画があると聞いたが、今後の課題として大事なことだと思う。自分たちのまちの素晴しいところをまず知ってもらう。このまちをどうしたらいいかを真剣に考え実行することがいちばん大事だと思っている。

３．質疑応答・意見交換

天橋立周辺地域の景観まちづくり活動の発展に向けて

事務局　：昭和43年に隅櫓を復元するとき、観光地としてあまり知られていないところで自分たち金を出しあって本物をつくろうと思ったきっかけ、その迫力はどこから出たのか。

上坂先生：出石のまちのシンボルだった城が明治の廃城令で取り壊され、但馬の中心だった出石の勢いが大正の頃から落ちていった。何をしたらいいか模索する中で城の復元が叫ばれるようになった。これを起爆剤に一人でも多くの人に出石を知ってもらい、観光客を集めたいと思った。城崎から天橋立へ行くバス1台でも、たとえ10分でもいいから寄ってもらおう、これが原点だった。姫路城の修復に関わった人たちと知り合いになったことは大きな収穫だった。

事務局　：昭和48年に観光協会を改組されるが、ふつうは観光業者に増資をもちかけるところ、一般の方に声を掛けようと考えた背景はどういうところか。

上坂先生：商工会青年部で活動する最後の年にこの問題に関わった。観光客が増えはじめ、イベントを大勢で取り組まないと立派なものができなくなって、広く呼びかける必要があった。観光に直接関連しない人たちを中心に活動したことが成功のもとだと思う。

事務局　：わがまちの産業を何とかしようという雰囲気で、観光をキーワードにみんなが集まったという感じか。

上坂先生：「風が吹けば桶屋が儲かる」式で、当初は観光客なんて自分たちに関係ないという人が多かったが、入込み客が増えるとどこかで自分の商売と関係するという理由もあった。

事務局　：観光客入込み数が昭和50年から51年に一気に20万人から40万人になったが、増えたほとんどが県内からの客なのはどうしてか。

上坂先生：マスコミの力が大きい。国鉄周遊指定地になったのと、とくに女性週刊誌が国鉄の「ディスカバージャパン」のブームで取り上げたことも大きく影響していると思う。

事務局　：昭和50年以後は順調に入込み数が伸びているが、兵庫県内の方が面白そうだから行ってみようかというので増えたと考えてもいいか。

上坂先生：宣伝も近くを対象にしていた。

事務局　：昭和58年に静思堂が完成し、静思塾で勉強する中で、いいまちだと周りから教えられ、町並みを大切にしようという意識が高まり、まちが変わっていったのか。

上坂先生：口コミが大きい。あちこちで講演されていた草柳先生の力は大きかったと思う。

事務局　：昭和60年頃から景観形成地区指定、旧城下町再生計画策定、そしてHOPE計画は全国的に有名で、みんなが出石に見学に行った。宮脇檀氏、水谷頴介氏などの専門家を地元の方がうまく使ったという感じがするが。

上坂先生：彼らがうまく国とつないでくれた。HOPE計画は、建築家・小林郁雄氏が応募を勧めてくれた。機会があるたびにそういう人たちが出石を引っ張り出してくれた。

事務局　：出石の景観の基本的なルールは都市景観形成基準が一つのルールになっているのか。

上坂先生：現在は都市景観形成地区で、次に枠を狭めて伝建地区指定の認可を得ると、町並み保存はこちらに移る。

事務局　：町並み環境整備事業をはじめ、考えられる事業をうまく活用している。宮津も参考にして取り組めばどうか。中心市街地活性化計画からTMO事業構想の流れは宮津の方もぜひ聞きたいと思うので補足していただきたい。

上坂先生：まちづくり公社を立ち上げた経過は、任意団体である観光協会では財産ももてないし、大きな事業をしようと思っても事業主体になれない。何とか法人化できないかと考え、第三セクター方式の出石まちづくり公社株式会社をつくったところ、通産省と兵庫県から中心市街地活性化事業のTMO事業主体にぴったりだといわれて名乗りを上げた。

貸店舗（まちづくり公社運営）

真っ先に事業化したのは集合貸店舗「びっ蔵」。TMO事業で国と県から4分の3の補助金を受けて、登城橋、登城門の前に7店舗の集合貸店舗をつくった。その背景には、出石町と商工会で空き店舗対策の調査をすると、商売をやりたい人は多いがミスマッチがあった。「びっ蔵」を始める前に試験的に商工会の裏の空き地に小さな店舗を2軒つくったところ、十数人から応募があった。1軒は乳牛を飼っている若い人がつくるアイスクリーム、もう1軒は温泉まんじゅう、どちらも順調である。まちづくり公社は町民出資で、観光協会や商工会も一緒にやっている事業なので、町外から人を入れることに賛成しない。「びっ蔵」はそば屋、土産物屋以外という条件で店舗を選んだが、

あまり制約すると続けてやる場合に難しくなる。今後は徐々に変わっていくだろう。

まちづくり公社は、観光協会の職員をそのまま採用した。これまでは役場の職員並みに手当がついたが、株式会社となると利益が出れば、まずまちづくりに使い、株主へ配当して、そのうえで頑張って利益が出たらボーナスを出す。現在は順調なので、3回目の決算ボーナスを出そうと考えている。

中心市街地活性化法が改正されてハードルが高くなったが、国のほうもやる気があるところには援助をすると宣伝しているので、大いに活用すればいい。

事務局　：町並みを活かすことに対して住民の理解は変わってきたか。

上坂先生：町並み保存を観光中心でしていた頃は一般の人たちは白い目で見ていた。いくら頑張ってもいつ観光客が来なくなるかわからないとか、大勢来られたらかえって迷惑するという住民もいた。駐車場が整備できるまでは狭い道路は大変だった。それがいつ頃からか理解してもらえるようになった。かつては町並みについても疑問視されたり苦情が出ていたが、伝建の説明会では反対意見はなく、なぜうちのまちをはずすのかという話まで出ている。一度外に出た人たちから出石はいいまちだといってもらう、その積み重ねで住民が自分のまちに誇りをもつようになった。そこから私たちの活動を認めてもらえたのではないか。また、まちやデザインマニュアルをつくって、まず建設に関わる人たちに知ってもらい、そういう専門家が説明すると一般の人もわかりやすい。自分のまちのよさを外の人たちから教えてもらい、自分たちもそれを誇りに思うようになったのではないか。

参加者　：資本金9,800万円のうち2,800万円が大株主、残り7,000万円は330名の株主だが、ほとんど個人なのか。団体や企業も参画しているのであれば、その件数はどれくらいか。

社員数14名で売上高1億6,000万円は生産性が非常に高い。社員の構成は女性10人、男性4人であるが、男性と女性の役割分担についてお聞かせいただきたい。

上坂先生：株主の内訳は、団体は豊岡市、出石観光協会、商工会、あとは個人と企業である。個人は1? 2株、企業は10株が多い。農家、サラリーマン、いろいろな業種の人が参加している。

公社の仕事は、女性は主力の物産販売を担当し、男性は支配人1人、あとはイベントの企画・運営、びっ蔵の営業指導である。

参加者　：出石のそばは味が落ちたように思う。商売一辺倒になって味が変わったのではないか。非常に残念である。

上坂先生：地域ブランド認定に向けて、変な業者の規制に動いている。観光バスで来る団体が入るところはまともなそばではないと思っている。ほとんどの店はきちんとした商売をしている。

参加者　：伝建地区に指定されると、街道から見える部分は8割補助だが、内部の修理には補助金が出ない。出石町で町並みを保存する際に空き家はどうしているのかお聞きしたい。

まちづくり公社に豊岡市が20%出資しているが、市として魅力があるから出したのか。

上坂先生：空き家・空き店舗対策は非常に難しい。まちづくり公社が空き家を借りて、そこに農家が店を出すという実験をやった。町並み保存については、観光で儲け主義に走ってはいけないと学者はいうが、いい町並みを残そうと思ったら採算がとれないとだめだ。出石に観光客が大勢来てくれるが、まだ旧市街地の3分の1ぐらいしか移動しない。これが半分以上になるような仕掛けづくりをしたい。芝居小屋「永楽館」を復元して、そこを核に大勢の人が通るようになると商売人が何か考えてくれると思う。都会の人たち

に町家とか農家に2? 3泊してもらう簡単な民宿とか、貸し農園と農業指導をセットにしたものとか、いろいろやっていきたい。宮津の場合は海の関係で何かできるのではないか。

豊岡市の出資については、出石町の持ち分500株2,500万円が合併によって豊岡市に移った。その後、観光協会が法人化の際に100株を譲りうけた。豊岡市に数ある第三セクターのなかで3%の配当金を出しているのは、まちづくり公社だけである。

事務局　：町家の修景に対する補助は、町並み環境整備事業で補助が出るのか。

上坂先生：今後、伝建地区内は伝建の関係で修景をするが、これまでは景観形成助成事業の補助と、商工会関係でも空き家対策事業で修復や改造資金が出る。

参加者　：まちづくりは住民が主体ということで、出石町ではどういう事業にも住民の後押しがあるように感じているが、宮津はそのあたりが20年ほど遅れているように思う。住民の協力を得るためには泥臭い話もあったと思うが。

上坂先生：確かに裏表があったが、年月が経つにつれていい思い出となった。PTAの仲間とは今でも観光協会や商工会で一緒に活動している。遊びや飲むことを通じて仲間が大勢できた。町長とか議員が協力的で静思塾で一緒に勉強したことがよかったと思う。

事務局　：宮津のまちづくりに対してアドバイスをいただきたい。

上坂先生：宮津には素晴しい財産があって羨ましい。海と天橋立と山の素晴しい風景、そこで活躍した俳人や文人たちの足跡をたどるだけでもすごいストックがあると思う。花街の風情が残っているので、うまく活用してはどうか。いい町並みを残そうと思ったら、気がついたときから手を付けていけばいい。そのまちに根づいたすごいものがあれば、まちの宝として残していくべき。次は仲間を連れてぜひ見にきたい。

参加者　：まちづくりで成功しているのは町レベルが多いように思う。こういう運動を広げていくのは町ぐらいの規模がやりやすいのではないか。宮津市はそれより規模が大きいので、どのようにできるか考えを聞かせてほしい。

上坂先生：それぞれのまちがそれぞれ頑張ってやっている。自分たちのまちで何をするかを考えるのがいちばん大事である。

４．閉会